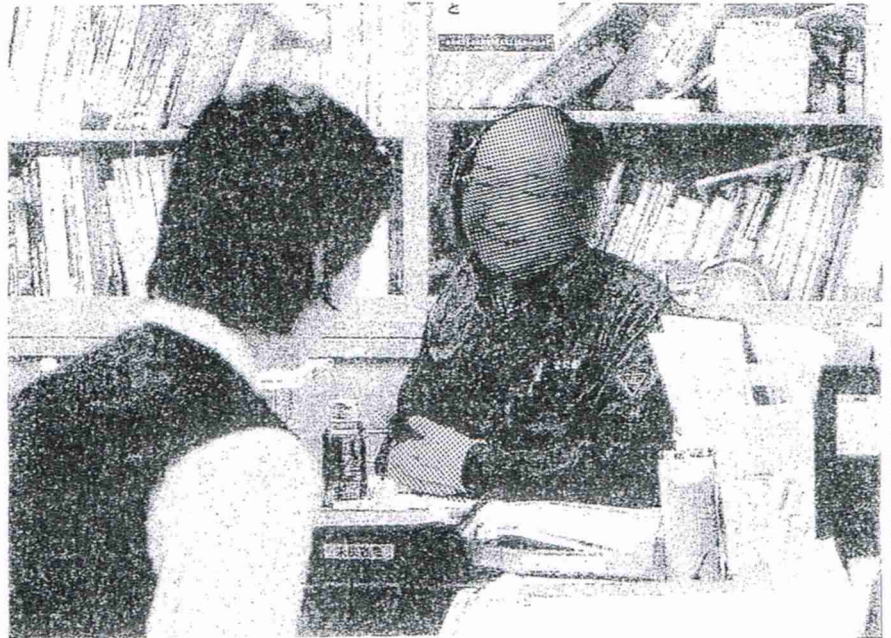


# 社会人

第120話

電気工事会社を興し、刑務所や少年院から人材を受け入れる保護司の竹中さん(埼玉県内)

## 岐路を駆けた



活が続けられるようにならない。人生の再出発の道は不安定で危しい。仕事を軸にした日々の人間関係の中から、世の中はむやみに敵対すれば牙をむき、周囲への感謝は逆に大きな助けをくれることを知ったという。「戦争は許されるのに、人を殴るのはダメなのか」。不良時代に振りかざした論理は、いつかしほんだ。

### 希望の「オヤジ」

ただ、やり直しの人生は平たんではない。協力雇用主や保護司になった今も、様々な会議や行事の場で犯罪歴のある者への心ない言葉が耳に入る。竹中の会社で働く元暴力団員の男性は「オヤジは強さを感じる時、引き受けてくれる子を守ってやらないでくれよ」。自らの

それは外部の人に接する時の多く、踏ん張り、誰かを助けることにつながる。そんな思いをかみしめる。

「竹中」という仮名を使う理由でもある。竹中は今春、自宅の一部を改築し、少年院から出たばかりの少年らが生活する「子どもの家」という施設をつくった。食堂や談話室も用意し、約10人が寝食をともにできる。「行き場がない」と

自暴自棄になった自分のような例を繰り返さずに済むよう、自立の準備のための場所を用意してやりたい、と願った。「考えてみればいつの間にか、あきらめかけた夢もかなっていた」と竹中は言う。実は小さい頃から、先生になることにあこがれていた。少年院に送られたことで、壊れたと思っていた夢。その後の奮闘の中で、電気工事の指導員として、さらには保護司として、「先生」と呼ばれるようになった。人生は変えられる。もう一つ、すね者だった自分が得た「オヤジ」という呼び名。面倒をみた少年らが尊敬と愛情を込めたこの名前も大切に、これからも少年らの更生への道程を照らす。

敬称略 (植松正史)

「感想や自らの体験談を「社会人取材班」まで、ファクス(080-6225-6271)、手紙、電子メール(shakai@kyo-nikkei.co.jp)にお寄せください。

# やり直せる俺を見る

中2で不良に 中学2年の秋、生徒会長から一転して暴走族のリーダーになった。父親が多額の借金を抱え、高が絶対的になった。校進学が絶望的になった。行のがきっかけだった。「行き場がなくなっ」と感じてタガが外れ、教師や他校の生徒、暴力団員までも相手にして暴行を繰り返した。3度目の傷害

「少年院で変わったのですか？」 竹中がよく聞かれる質問。だが、即答できない。確かに、教官の支えてくれた大人からのありがたみを感じ、資格を得るための勉強もできた。だが出院する時、「俺はヤクザになっても確信は持てない。でも、夜勤が中心で、仕事だけはしっかり続けたい」との不安がよぎった。小さな結晶が積み重なって、周囲からの信頼

重なり、周囲からの信頼を失った。まともな学生な排除の目にさらしたくない。